

夏季管理の徹底と適期収穫を！
夏場の病虫害防除の徹底を！！
高温対策及び風害防止対策を万全に!!!

I 要 約

- 露地ぶどうは、適正着果及び過繁茂防止に努める。
- 無加温ハウスぶどうは、品種特有の着色や糖度などで総合的に判断し、適期収穫に努める。
- もも、なしは、徒長枝の整理や支柱入れ、枝吊りを行う。
- ももは、果実の着色や地色の抜け、硬さなどを総合的に判断し、適期収穫に努める。
せん孔細菌病の枝病斑は、見つけ次第、枝ごと切り取り、適切に処分する。
- シンクイムシ類、カメムシ類、ハダニ類や西洋なしの輪紋病、黒斑病など病虫害の発生動向に十分注意し、適正な防除に努める。
- 高温による日焼けや乾燥対策、台風等に備えた風害防止対策を万全にする。

報道機関用提供資料	
担当課	農林水産部りんご果樹課
担当者	生産振興グループ GM 小笠原 宜弘
電話番号	直通 017-734-9492 内線 5146
報道監	農林水産部 次長 栗林 豊 内線 4967

II 特産果樹生産情報

1 生育概況

もも、西洋なしの果実肥大は、五戸で7月30日現在、平年を上回っている。

○もも、西洋なしの果実肥大

(7月30日現在、横径cm、%)

地域	樹種(品種)	本年	平年	前年	平年比
五戸 (県南果樹部)	もも(川中島白桃)	6.3	5.2	5.7	121
	西洋なし(ゼネラル・レクーク)	6.9	5.9	6.8	117

注1) 平年値：ももは2009～2023年(15年間)の平均、西洋なしは2004～2023年(20年間)の平均

2) ももの横径は縫合線を挟んだ最大径(側径)

2 作業の重点

(1) ぶどう(露地栽培)

ア 結果枝の管理

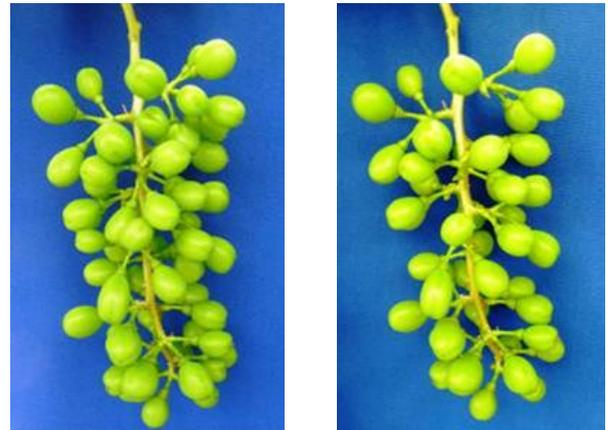
葉数は着色が始まる頃までに20～25枚確保する。新梢は着色後わずかに伸長する程度が望ましいが、その後もかなり伸びる場合は随時摘心する。

結果枝が混んでいる場合は、摘梢や誘引を行い、過繁茂防止に努め、果房や結果枝の基部葉まで日光が十分に当たるようにする。

イ 摘粒

8月上旬頃(果粒軟化期前)には終える。

品種別の摘粒の目安は次表のとおりである。小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側に向いた果粒を除去し、目安の果粒数にする。



シャインマスカットの摘粒前後の果房
(左：摘粒前、右：摘粒後)

品種別目標果房重と果粒数（摘粒の日安）

品種	果房重（g）	1粒重（g）	果粒数（粒）
スチューベン	300	4.0	70～80程度
キャンベル・アーリー	300	5.5	50～60程度
シャインマスカット	450～550	12～13	40程度

ウ 袋かけ（シャインマスカット）

品質向上やかすり症の軽減対策として、果粒軟化期以降に袋かけを行う。袋かけは摘粒と薬剤散布を済ませてから行い、袋は収穫時まではずさない。また、気温が30℃を超える極端に高温な日や時間帯は、日焼けを助長する可能性があるため袋かけ作業は行わない。

エ 病害虫防除

（ア）薬剤散布

キャンベル・アーリー基準

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 ／10 a
8月上旬	ストロビートライフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフロアブル 2,500倍	—	250ℓ

注1) 展着剤は使用しない。

2) ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブルとストロビートライフロアブル及び同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。

スチューベン基準

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 ／10 a
8月上旬	アミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビートライフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフロアブル 2,500倍	—	250ℓ

注) キャンベル・アーリー基準と同様。

シャインマスカット基準

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 ／10 a
8月上旬	アミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビートライフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフロアブル 2,500倍	—	250ℓ
8月中旬	レーバスフロアブル 3,000倍	—	250ℓ

注) キャンベル・アーリー基準と同様。

(イ) ベと病対策（スチューベン、シャインマスカット）

発病葉や発病果房は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長く溜まらないようにする。

スチューベンで、例年秋季に葉での発生の多い園地では、「8月中旬」にレーバスフロアブル3,000倍を特別散布する。レーバスフロアブルは薬剤耐性発達の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。

シャインマスカットで、長雨が見込まれ、発生が懸念される場合は、「8月下旬」にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍を散布する。ランマンフロアブルとライメイフロアブルは同じ系統の薬剤であり、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とし、連続使用しない。

(ウ) 晩腐病対策

発病果粒や発病果房は見つけ次第摘み取って、適切に処分する。園地内の排水や風通しを良くし、過湿にならないようにする。

(エ) 灰色かび病対策

新梢の摘心や誘引を適切に行い、園地内の風通しを良くする。発病葉、発病果及び発病枝はできるだけ早く取り除き、土中に埋めるなどの処分をし、他へ伝染しないようにする。

長期貯蔵向けの場合、スチューベンでは「8月下旬～9月上旬」に、シャインマスカットでは袋かけ前の「7月下旬～8月上旬」にフルーツセイバー1,500倍を特別散布する。フルーツセイバーは薬剤耐性発達の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。シャインマスカットの袋かけは薬液が乾いてから行う。

(オ) チャノキイロアザミウマ対策（シャインマスカット、袋かけ前）

発生が懸念される園地では、袋かけ前まで10日間隔で防除剤を特別散布する。

「8月上旬」及び「8月中旬」の防除剤は、ディアナWDG10,000倍又はデリゲートWDG10,000倍とする。薬剤散布後、薬液が乾いてから速やかに袋かけを行う。

(2) ぶどう（無加温ハウス）

ア ハウス内の温度管理

外気温が30℃を超える日は光合成能力が著しく低下し、果実の日焼けなど高温障害の発生が懸念されるので、ハウスのサイド、妻及び屋根の谷間を巻き上げるなどして換気する。

イ 収穫

収穫は品種特有の着色を示し、芳香を放ち、食味も良くなり固有の風味に達してから行う。収穫時の糖度は、キャンベル・アーリーでは14%を目安とする。

キャンベル・アーリーは着色が良いため、低糖度の果房や未熟果が収穫されがちなので、果皮色が紫黒色となり、果粉に覆われ品種固有の食味に達してから収穫する。

＜収穫時の留意事項＞

(ア) 朝夕の果実温度の低い時間帯に収穫する。

(イ) 完熟果でも降雨があった直後は糖度が低下し、輸送中の腐敗も多くなるので、なるべく晴天時に収穫する。

(ウ) 脱粒したり果粉が落ちたりするので、穂軸を持って丁寧に扱う。

(3) も も

ア 徒長枝の整理、支柱入れ、枝吊り

樹冠内部を明るく保つため、太枝の背面や先端部から伸びた生育が旺盛な徒長枝は除去する。日焼け対策として残す場合は、5～10cm程度の長さで、葉芽を残して切り取る。

果実の肥大とともに、枝が下がり、重なり合ってくるので、支柱入れや枝吊りを行う。

日焼け果の発生防止のため、高温が続くと予想される場合は、徒長枝の整理や支柱入れなどの作業は控える。

イ 着色管理

十分な新梢管理や支柱立て、枝吊りなどを行ってから、果実に直接かぶさっている葉を数枚摘み取る。摘み取り過ぎると、外観や品質の低下を招くので注意する。

反射資材を敷くと、樹冠内の光環境が改善され、着色向上に役立つが、着色が先行するため、未熟果を収穫することのないよう、収穫適期の見極めには十分注意する。

反射資材の敷設時期は、無袋栽培では収穫予定日の7～10日前、有袋栽培では収穫予定日の10～14日前（除袋2～3日後の果実の先端部が少し着色し始めた頃）を目安にする。天候不順が予想される場合は早めに行う。

ウ 除袋

除袋の適期は概ね収穫の10～14日前頃である。果実が品種本来の大きさになり、果皮が全体的に白みがかかり、地色が5～6割抜けた（果梗部と縫合線周辺に青みが残る）頃を目安とする。天候不順が予想される場合は2～3日早める。

除袋後は果実に直接かぶさっている葉を摘み取る。

エ 収穫

果実の着色や地色の抜け、手触りなどを総合的に判断し適期に収穫する。日当たりの良い南側や西側の主枝・亜主枝先端の大玉の果実ほど早く熟し、樹冠内部は遅れる。樹全体で見た場合、収穫期間には10日程度の幅があるため、収穫は数回に分けて行う。

収穫は地色が淡黄緑色になり、着色の良いものから始める。収穫時の糖度は早生種で10%、中生種で11%、晩生種で12%を目安とする。果実の硬さは、手のひらで押さえた時にわずかに弾力を感じ、指で軽く押さえても跡がつかない程度がよい。

収穫直前に高温の日が続くと熟期が早まるので、こまめに収穫適期を判断する。

オ 病害虫防除

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10a
8月上旬	バルコートフロアブル 2,000倍 又はストロートドライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍	ダイジロン水和剤34 1,000倍 又はダントツ水溶剤 2,000倍 又はジノテフラン剤 2,000倍 又はテルスターフロアブル 3,000倍 又はスカウトフロアブル 2,000倍	400ℓ
8月中旬	ロブラール水和剤 1,500倍 又はDMI剤	スカウトフロアブル 2,000倍 又はモスピラン顆粒水溶剤 4,000倍	400ℓ
8月下旬	ストロートドライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍	スカウトフロアブル 2,000倍 又はモスピラン顆粒水溶剤 4,000倍 又はジノテフラン剤 2,000倍	400ℓ
9月上旬	ロブラール水和剤 1,500倍 又はDMI剤	—	400ℓ

注1) ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

2) DMI剤：インダーフロアブル5,000倍、アンビルフロアブル1,000倍、スコア顆粒水和剤2,000倍、オンリーワンフロアブル2,000倍

3) ロブラール水和剤とDMI剤は、薬剤耐性発達の懸念があるので、それぞれ年1回の使用にとどめる。

4) ダントツ水溶剤は、使用時期が「収穫7日前まで」なので、早・中生品種に散布する場合、十分注意する。

(イ) せん孔細菌病対策

薬剤散布と耕種的防除を組み合わせた総合的防除を徹底する。なお、風を強く受ける地帯で多発するので、防風対策は必ず行う。

枝病斑は重要な伝染源なので、見つけ次第切り取り、適切に処分する。被害果実も見つけ次第摘み取って適切に処分する。



せん孔細菌病の夏型枝病斑

(ウ) シンクイムシ類対策

幼虫が果実から脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

ナシヒメシンクイによる新梢の芯折れは見つけ次第切り取り、適切に処分する。

(エ) カメモシ類対策

断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第つぶす。ふ化幼虫は分散する前に捕殺する。

発生が見られる園地では、「8月上旬」にダントツ水溶剤、ジノテフラン剤、テルスターフロアブルのいずれかを選択する。

(4) な し

ア 徒長枝の整理、支柱入れ、枝吊り

樹冠内部を明るく保つため、徒長枝は、将来、結実枝として使用するもの以外は、枝の基部から除去する。

果実の肥大とともに、枝が下がり、重なり合ってくるので、支柱入れや枝吊りを行う。

日焼け果の発生防止のため、高温が続くと予想される場合は、徒長枝の整理や支柱入れなどの作業は控える。

イ 収 穫

(ア) 西洋なし

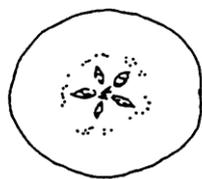
収穫時期が早過ぎると追熟が正常に進まず硬いままであり、遅すぎると内部褐変などが発生するため、適期に収穫する。収穫適期は気象に大きく左右されるので、満開後の日数、ヨードでんぷん反応、地色などの状況から総合的に判断する。

早生品種の満開日からの日数による収穫始めの目安

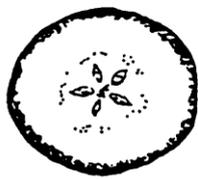
品種	満開日から収穫始めまでの日数	ヨードでんぷん反応指数	地色指数
プレコース	110日	4～4.5	2～2.5
バートレット	125日	3～3.5	2～2.5

注1) ヨードでんぷん反応指数：下図参照

2) 地色指数：「日本なし地色用カラーチャート」を使用し、ていあ部（果実の尻の部分、下図参照）のコルク層を薄くはぎ、変色しないうちに比色する。



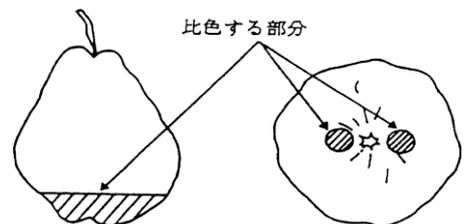
0 : 100%でんぷん消失



1 : 90%でんぷん消失



2 : 70%でんぷん消失



比色する部分

<ていあ部>

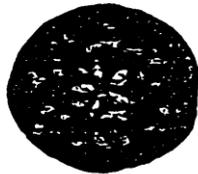
地色の見方（ていあ部）



3 : 50%でんぷん消失



4 : 30%でんぷん消失



5 : ほとんど染色

ヨードでんぷん反応指数（でんぷんの消失割合）

(イ) 日本なし

収穫適期は糖度や果皮の地色からも判定できるが、食味で判定するのが最も簡便かつ正確である。ジベレリンペーストを使用した場合、成熟期は5～7日くらい早まる。

イ 病害虫防除

(ア) 薬剤散布 (西洋なし)

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
8月上旬	オキシラン水和剤 500倍 又はバルクト水和剤 1,000倍	スカウトフロアブル 2,000倍 又はダイジン水和剤34 1,000倍	450ℓ
8月中旬	ストロビードライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍 又はキャプレート水和剤 600倍	スカウトフロアブル 2,000倍 又はテルスター水和剤 1,000倍	450ℓ
8月最下旬	オキシラン水和剤 500倍 又はキャプレート水和剤 600倍	ジノテフラン剤 2,000倍	450ℓ

注1) ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

2) ストロビルリン単剤のストロビードライフロアブル及び同じ系統の混合剤であるナリアWDGは、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。

3) プレコースやゼネラル・レクラークなどの早・中生品種に散布する場合、収穫前日数に注意して薬剤を選択する。

(イ) 輪紋病対策

樹勢が衰えると枝幹が被害を受けやすくなるので、樹勢を適正に保つ。発病枝は伝染源となるので、見つけ次第切り取り、適切に処分する。

ゼネラル・レクラークやラ・フランスなどの中・晩生品種では「8月最下旬」も重要な防除時期になるので、必ず薬剤散布を行う。

(ウ) 黒斑病対策 (ゼネラル・レクラーク)

徒長枝は発生源となりやすいので、不要なものは夏のうちに切り取る。

発病果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

発生が見られる園地では、「8月中旬」にストロビードライフロアブル又はナリアWDGを、「8月最下旬」にオキシラン水和剤を選択する。

(エ) シンクイムシ類対策

幼虫が果実から脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

(オ) カメムシ類対策

断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第つぶす。ふ化幼虫は分散する前に捕殺する。

「8月上旬」に発生が見られた場合は、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。

「8月中旬」に発生が見られた場合は、テルスター水和剤1,000倍を選択するか、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。

(5) おうとう

ア 追肥（礼肥）

追肥が済んでいない園地では速やかに行う。

施用量は成木（11年生以降）で10 a 当たり窒素3.0kg、リン酸1.2kg、カリ2.4kgを目安とする。施肥量は土壌条件や樹勢によって加減する。

イ 病害虫防除

(ア) ハダニ類対策

発生が多い場合は、マイトコーネフロアブル1,000倍、コロマイト乳剤1,000倍、カネマイトフロアブル1,000倍、ダニサラバフロアブル1,000倍、スターマイトフロアブル2,000倍、ダニゲッターフロアブル2,000倍のいずれかを散布する。

殺ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、年2回以内使用のものでも年1回の使用とする。ダニサラバフロアブルとスターマイトフロアブルは合わせて年1回以内の使用とする。

(イ) ウメシロカイガラムシ対策

発生の多い樹では、8月上旬～中旬（幼虫ふ化最盛期）にアプロードフロアブル1,000倍を特別散布する。

(6) うめ・あんず

ア 追肥（礼肥）

収穫後に標準施肥量の20%を施用する。施用量は成木（9年生以降）で10 a 当たり窒素2.8kg、リン酸1.2kg、カリ2.0kgを目安として施用する。施用量は土壌条件や樹勢によって加減する。

イ ウメシロカイガラムシ対策

発生の多い樹では、8月上旬～中旬（幼虫ふ化最盛期）にアプロードフロアブル1,000倍を特別散布する。

(7) 核果類共通（おうとう、もも、うめ、あんず、すもも、ネクタリン）

ア コスカシバ対策

生育期に枝幹部や地際部に樹脂（ヤニ）又は虫糞の発生が見られる場合は、削り取って幼虫を捕殺あるいは刺殺する。もしくは、虫糞を取り除き、ロビンフッドのノズルを孔に差し込み、薬液を噴射する。

(8) 共 通

ア 高温・乾燥対策

収穫は、果実温が高い日中を避けて行い、収穫した果実は速やかに冷蔵庫に入れるか、日陰に置くなど鮮度保持に努める。

苗木や若木は乾燥の影響を受け易いので、園地の状況を把握し、干天日（降水量5mm未満）が2週間程度続いたら、1㎡当たり20ℓ程度をかん水する。

また、草からの蒸散を防ぐため、草刈りをこまめに行い、樹冠下に敷き草する。

イ 風害防止対策

台風等に備え、垣根、支柱、防風網等を再度点検し、必要に応じて補強や補修等をする。また、幹や主枝などに空洞などが生じている樹は支柱で支え、縄などで補強する。幼木は倒伏しやすいので支柱を立てて結束する。

青森県農薬危害防止運動展開中（6月～8月）！

《 農薬使用基準の遵守 ポジティブリスト制への対応 》

農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認する。

農林水産省「農薬登録情報提供システム」 (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

農薬の使用にあたっては、事前に周辺住民に対し、農薬の散布日時や使用者の連絡先等を十分な時間的余裕を持って知らせる。また、農薬の飛散により、周辺作物や近隣の住宅等に被害を及ぼすことのないように農薬飛散低減対策に留意して散布する。

《 熱中症予防運動展開中！（6月～8月） 》

熱中症による緊急搬送者が近年増加傾向にあります。こまめな休憩をとり、水分・塩分補給を行い、熱中症を予防しましょう。

詳しくは、こちらをご覧ください。

・熱中症予防運動 (<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/8811>)



《 ツキノワグマ出没警報発令中！ 》

ツキノワグマ出没警報発令中です。農作業は、1人での作業を避け、ラジオやクマよけスプレーを携帯するなど、人身被害の防止に努めましょう。

《 環境にやさしい農業に取り組んで、みどり認定を受けましょう 》

みどりの食料システム法に基づき、土づくりと化学肥料・化学農薬の使用低減などに取り組む農業者の認定制度【みどり認定】が始まっています。認定を受けると、設備投資の税制優遇や国庫補助事業の採択優遇などのメリットがあります。

申請・お問い合わせは、最寄りの地域県民局地域農林水産部にご相談ください。

https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/noon/midori_kihontekinakeikaku.html

《 りんご属及びなし属植物の中国産花粉を使用しないで！ 》

中国において、火傷病の発生が確認されたため、中国産なし、りんごの花粉等の輸入が停止されました。

既に輸入された中国産花粉を介して火傷病がまん延することがないように、生産年にかかわらず、中国産花粉や来歴不明の花粉を入手・使用することがないようにお願いします。

《 青森県総合防除計画 》

総合防除とは、有害動植物の発生及び増加の抑制並びにこれが発生した場合における駆除及びまん延の防止を適時経済的に講ずることです。

青森県総合防除計画では、農業者が遵守すべき事項（「遵守事項」）の対象として、りんご「モモシンクイガ」を設定しているので、適切な防除に努めましょう。

※県は、モモシンクイガの防除が適正に行われるように、指導及び助言、勧告、命令を行うことができ、命令に従わない農業者は、30万円以下の過料に処されます。

○りんご「モモシンクイガ」の遵守事項（一部要約）

（1）予防に関する措置

被害果は必ず処分するとともに、交信攪乱剤の設置や袋かけを行う

（2）判断、防除に関する措置

被害果は見つけ次第摘み取り処分するほか、薬剤散布による定期防除を行う

詳しくはこちらをご覧ください。

・青森県総合防除計画 (<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/8140>)



農業保険に加入し、農業経営に万全の備えを！

次回の「特産果樹生産情報」第6号は9月2日（月）発表の予定です。